

# 世田谷・九条の会

世田谷・九条の会  
ニュース No.62

2021年08月27日発行  
(題字 西山簡石)

●事務局 〒154-0017 世田谷区世田谷 1-11-16 世田谷民商気付  
Tel:03-6413-9547 Fax:03-6413-9548 Mail:setagaya-9jou@kzh.biglobe.ne.jp  
●ホームページ <http://www7a.biglobe.ne.jp/~setgagaya-9jou>  
●郵便振替口座 記番号 00110-5-260741 世田谷・九条の会

## 核武装を許さぬために

高橋 至

東日本大震災（3・11）の翌年、2012年に「脱原発社会をめざす文学者の会」が発足した。作家の加賀乙彦さんを会長に作家、詩人、評論家、編集者などが集まった会で、ただ一つ「原発のない社会の実現」ということが会の目的である。主な活動は、被災地福島を訪問し自身の目で現場を見、その地の人々の話を聞くこと。同時に文学サロンと称して、金子兜太さんやドリアン助川さんらをお招きしてお話を聞く会を持つことなど。どちらもコロナ禍のため昨年からは中止しているが共に8回を重ねている。

今年は3・11から10年となるのを機に、この災厄と正面から向き合った文学作品の中から我らが心打たれた作品を顕彰する文学大賞を創設した。いとうせいこうさん、多和田葉子さんらに快く受け取ってもらった。

あれほどの被害をもたらした原発推進政策をなぜ続けるのか？ 電力会社の利益の追求という面は当然であるが、みなさん既にご存知の様に、原発の継続が核兵器の技術への転換を可能にするためなのだ。であるからこそ、脱原発を実現することは、この国の核武装を許さない重要な戦いである。

「九条の会」創設メンバーの一人、井上ひさしさんは3・11の起こる20年以上前にすでに原発の危険性を指摘して「これからありうるたった一つの保険は、われわれ一人一人が保険料として反原発の行動を積み立てて行くこと」と書いている\*）。

\*）「反原発運動は保険料である」 『朝日ジャーナル』 1988年5月6日13日合併号  
（「脱原発社会をめざす文学者の会」常任幹事、弦巻在住）

## 76 回目の「ヒロシマ」を迎えて考えたこと

深田 伊佐夫

76 回目の「ヒロシマ」を自宅で迎え、たまたまみんな仕事が休みであったため、家族そろって広島からのテレビ中継に合わせて、黙とうを捧げることができました。唯一の被爆国として、核兵器廃絶と世界恒久平和に向けた具体的な発信と行動をすることは、何よりも大切なわが国の使命と役割なのだと思います。

しかし政治家や保守論陣を張る人たちには、「核禁条約では核軍縮は実現不可能」「保持して使わずが理想の抑止力」という考え方が広く浸透しているようです。とうに崩壊した、バランス・オブ・パワーの考え方に基づくものでしょう。「保持して使わず」という考え方では、軍縮どころか、際限のない軍拡の道を歩むことになるでしょう。

こんなことを記しながら、筆者が淡島幼稚園に通っていたころのある出来事を思い出しました。近所に住む N 君と帰宅の途中で、けんかになりました。彼は、口が達者でした。何かの拍子で、彼が「頭にくる」ようなことを言ったので、こちらも言い返して口げんかになりました。

そのうち 2 人は、道に落ちていた木の枝を持ち、チャンバラごっこのような状態になりました。そしてついに、石ころを手にした筆者は、こちらをからかいながら走り出した彼の後ろ姿に、思いっきり投げ後頭部に命中。流血事態となりました。「勝った」と思った瞬間、加害者となりました。

彼の親も大変なショックを受けました。筆者の親、幼稚園の先生も巻き込み騒動になりました。小林外科の院長先生もかかわって下さり「停戦条約」を結ぶ結果となりました。N 君は 50 数年経た今も、心の中に傷を持っているようです。

「子供のけんかと、戦争ではレベルが違う」と思われそうですが、徐々に争いがエスカレーターすること、より強い道具を用いようとする点では、どちらも同じでしょう。「保持して使わ



ず」という理屈は、いつしか「保持していると使いたくなる」に変化することは明らかです。そして「保持」の基準は、無限に拡大します。

ところで筆者は、ある宗教団体の奉職者として東京西郊の青梅市で教育施設の運営、人材育成、付帯する広大な教団所有林の管理に40年ほど携わっています。そして、依拠する経典『法華経』には、「平和」「共生」に関する多くの説話があります。それらを集約すれば「自然と人間、人間と人間との間の調和」という平和観に到達すると考えています。そのなかのひとつ、「常不輕菩薩品第二十」には、すさまじいまでの不戦の精神が説かれています。

説話は、「釈尊の前世とされる常不輕菩薩は、すさんだ時代の人々の心の中にも、必ず仏になる可能性(仏性)があると確信していました。そして出会う人一人一人に、『あなたは必ず仏になることができる方です』と、丁重に礼拝しました。しかしこれをよく思わない人々や価値観の異なる人々は、彼のことをののしり、棒ではたき、石を投げつけました。ところが彼は、傷だらけになりながらも戦うことなく、笑顔で人々を礼拝し続け、ついには仏となった」というものです。

この説話は、宮沢賢治の「アメニモマゲズ」の詩の中に登場し、「サウイウモノニ ワタシハナリタイ」と記された「デクノボー」であることが知られています。また、宗派を超えて仏教徒の示す姿勢としても語り継がれています。インドのマハトマ・ガンジーの非暴力・不戦の信念の中にも生かされている考え方でしょう。

とはいえ、理念だけ唱えても平和はやってこないと思います。そのためには、われわれ一人一人が何らかの身近な取り組みをしなければならないと思っています。その第一歩は、さまざまな環境や事象、人間関係の中で湧き上がる、自分自身の「いかり」「むさぼり」「なまけ」などの心に、正直に向かい合うことだと思います。自分自身も、社会の各分野で平和を求める方々と連携して、「人とまじわる」「社会とつながる」「自然ととけあう」ことを通して、信仰者・宗教者として平和の為に何ができるのか、ささやかな実践を始めています。

8.6、8.9、8.15 と、8月は平和を構築する上で、意義ある大切な日が続きます。これを機に、自分自身の平和への思いを再確認し、実践への誓いを新たにしたいと思います。

※本稿を、せたがや九条の会に所縁ある、故・中村博(叔父)の仏前にお供えします。

(代沢4丁目在住)

## 8月15日を前に

巾崎 宜晃

今日は2021年7月25日、快晴だ。今年も暑い夏がやってきた。一昨日、東京で2度目のオリンピックの開会式が行われた。この日、昨年から感染が拡大している新型コロナウイルスの第4波渦中の東京では、先週から新規感染者数が2,000名に迫っていた。自分はその前日7月22日に自衛隊の大規模接種会場で2回目のワクチンを接種できたので、お盆までには抗体ができ、車でなら埼玉の実家にお墓参りにも行けるかもしれない。

さて、ここのところ仕事で帰りが遅くなり、その日のニュースはNHKの夜9時の番組をNHKプラスというウェブサイトの再配信を利用して確認している。毎晩、新型コロナウイルス感染数がトップニュースだ。これまで北海道や沖縄が医療崩壊に直面した時、政府・道・県は、ともに東京との往来抑制を訴えて対応したが、オリンピック・パラリンピックでは世界200か国から6万人を超える選手・大会関係者が来日するという。



先月6月23日は沖縄県主催の慰霊の日で、今年も応募作品が選ばれた地元の中学性が「追悼の詩」を読んだ。あの日を忘れず伝え続けると。そして平和な世界を作るのは私たちだと。毎年、心を打たれる。沖縄では1945年6月に、日本軍と米軍との組織的戦闘が終了した。当時、沖縄に出兵していた父は戦闘中に頭部を負傷したため、4月に内地に引き上げることができ、九死に一生を得た。戦後も時々起こる頭痛や吐き気に悩まされた。サツマイモが嫌いなのは、戦時中に手に入るものが他になく、食べものといえばサツマイモだったから。自分が子供のころ、たまに車庫の隅でこっそり蛇もさばいてた。13年前に亡くなった。群馬の農家で育った母は長女だったので弟たちの面倒を良く見ていた。戦後、弟の一人が進駐軍のジープにはねられて亡くなった。心中如何ばかりかと。弟たちに慕われつつ、15年前に亡くなった。こうして自分には直接、戦争体験を伝えてくれる人が去って行ってしまった。今では生前にもっと聞いておけばよかったと思っている。

8月に入ると6日広島、9日長崎と日本に原爆が投下された日がやって来る。平和祈念（記念）式典では両市長が必ず核兵器の廃絶を訴えるが、実現への道は未だ遠い。人類に対する脅

威である核戦争や異常気候に対し、1国で取り組んでも効果がないが、取り組まなければ人類の敗北であり、国はそれぞれの国民が苦境に陥ることを知るべきだと歴史学者ハラリ氏が日経ビジネス1月11日号で述べている。その通りだ。専門家からは新型コロナウイルスによる医療崩壊の懸念が指摘される中でも200か国が参加してオリンピックが開催できるのだから、知恵を尽くせば200か国が協力して人間どうしが殺し合う戦争を無くすこともできるのではないだろうか。8月15日を前にそう思った。是非、人類ファーストで。 (野沢在住)

## 戦争の思い出

波多野 朗子

私は北海道の片田舎で生まれ、終戦のときは間もなく7歳、国民学校の二年生でした。北海道は一度だけ室蘭が空襲、艦砲射撃を受けたけど、私のところは空襲警報だけ。室蘭には富士鉄室蘭がありました。

一年生のもう夏休みに入っていたと思うけれど村の出身の人が飛行機で町に帰ってくるといので兄たちは5キロの道を走りました。町の真上を三回まわり、翼を振ったとき胴体に大きな日の丸が見えたとき騒いでいました。終戦直前の出来事でしたが、のちに特攻隊に行きその後の消息はきいていないので、戦死したのだと思います。

勤労奉仕とかで函館から中学一年生の男の子が農業の手伝いに来ていましたが夜、ふとんなかで泣いていたことも知っています。出征していく人を一度見送りました。貧しかったかもしれないが農家だったので食べるものはありました。戦争についていろいろわかるようになったのはあとあとのことです。

終戦の日は北海道も快晴で旧盆だったので外で遊びほうけていて、遅い昼食を食べていると父が町からかえってきて「戦争終わったわ」とポツンと言っただけ。またいつもと同じ生活が続きました。

学校は複式学級で教室はふたつだけ。大きな体育館があり1年と5,6年生がひとつの教室、2,3,4年生がもうひとつの教室でした。一年生では教育勅語も暗誦できたし、二年生では九九のかけ算や分数の計算もできました。5,6年の2年にわたって新しい憲法も習いました。正規の先生は校長だけで二人の先生は旧制中学卒業のお兄さん達でした。当時は皆そうであったように勉強する必要もなく遊び放題、でも家の手伝いはよくしました。夏休みの宿題はドンガイ

(イタドリ)の葉を干したものを提出することだったりして、代わりに茶々けたノートをもらったりしました。学校は石炭ストーブだったので秋には焚き付け用の枯れ枝を拾いに行ったりもしました。辛かったのは長靴もなく父が編んでくれたわら靴でした。春には雪解け水がしみて冷たくて足が切れるように痛かったことです。羊を飼っていたので服もズボンも靴下も手袋も帽子も毛糸で編みましたがオーバーは姉が毛布で作ってくれました。夏服は父親の羽織袴でつくり、多分母親の着物も使われたと思います。下駄や草履で学校に通いました。



父の弟たちはみな戦争に行きました。戦後間もなくの9月一番下の叔父が帰ってきました。頭の良い人ときいていましたが何も話さない人になっていました。何をやってもうまくいかず、祖母は「こういちなんか死んでくればよかったのに」と泣きました。40年もあとに父からきいたことですが2歳で父を失った農家の四男坊は口べらしのためだったのでしょう。16歳で軍隊に入り、海軍にまわされて最初にいったのが南京だった。それ以後終戦までの10年近く船を降りなかったとのことです。徳ちゃんと呼んでいた三男の叔父は私たちが遊んでいた縁側のそばの部屋に寝ていることが多く、ある日母親が「徳死んだわ」とつぶやきました。マラリアか日本脳炎で相模原の陸軍病院に入っていたけれど治りきらず返されて自宅療養させられていました。父のすぐ下の叔父は分家して子どももいたのですが徴兵されて満州に行き、終戦でロシアの捕虜になり、幸いというべきか中央アジアのタシケントに送られ、無事でした。

結核で23年か24年に送還されましたが、もしシベリアで強制労働されていたら生きては帰れなかったでしょう

父は長男で終戦の年40歳になっており、食糧増産のため国に残され出征はしませんでした。冬には旭川連隊で3ヶ月の訓練があり、辛かったと話していました。

私は10人兄弟姉妹の真ん中ですが子ども時代をあの寒村でけっこう平和に暮らしたと思います。北海道新聞は文化の中心という感じで小学生時代から読みいろいろなことを学びました。ラジオもモスクワ放送、北京放送、米軍放送まで聴きました。ラジオでの「たずね人」は長く続きました。

(北島山在住)

# 末期『戦中派』が、あらためて戦争の時代を思う (1/2)

梁田 政方

作家・吉村昭が、太平洋戦争末期の沖縄戦について書いたものに『殉国』という小説がある。その「あとがき」に森史朗氏が『昭和二年生まれと戦争』という見出しでつぎのように書いている。

「筆者が現役編集者時代に昭和二年生まれの作家同士、吉村昭・城山三郎両氏の対談を企画したことがある。昭和二年生まれと言え、いわゆる「末期戦中派」で、一年早く生まれていれば徴兵「兵役組」、一年後だと「学童疎開」戦後派世代となる。歴史の狭間に生を享けた、極端な世代ということになる」と。

ところで私も昭和二年(1927年)生まれである。昭和元年はわずか十数日しかない。したがって私はこの年号のほとんど全てを生きぬき、体験したことになる。つまり森氏のいう生粋の「末期戦中派」であるといえるだろう。確かに昭和の前半はすべて戦争によって塗りつぶされていた。私自身に関連させていけば、満五歳になったばかりの九月に柳条湖事件(満州事変)、十歳を迎える二ヶ月前に盧溝橋事件が起こり、日本軍隊による対中国全面侵略戦争が開始された。そしてその四年後の昭和十六年(1941年)十二月八日、太平洋戦争に突入した。その年九月に十四歳の誕生日を迎えたばかりの私は、三ヶ月後に日本の運命を根底から変える戦争の渦の中に巻き込まれた。いまでも目を閉じると、あの戦争開始のラジオ放送が聞こえてくる。その日十二月八日の午前六時、全国・全家庭のラジオはいっせいにつぎの放送をおこなった。

「大本営陸海軍部十二月八日午前六時発表・「帝国陸海軍は今八日未明西太平洋において米英両軍と戦闘状態に入れり」と。

この放送は何度も何度も繰り返して放送された。そしてこの日各家庭に配られた新聞朝刊には、つぎのような文字が「大見出し」で躍っていた。

「帝国・米英に宣戦を布告す」、「西太平洋に戦闘開始—布哇(ハワイ)米艦隊航空兵力を痛爆」、「米輸送船に魚雷」、「比島(フィリピン)・グアム島を空襲」、「シンガポールも攻撃」「マレー半島に奇襲上陸」「香港攻撃も開始」などなど。

これら日本軍の行動は、いまでいう「先制攻撃戦略」に基づく「敵基地事前攻撃」である。「宣戦布告」なき戦争開始が実際に行われていた。国民大多数が「開戦」を知ったのは前述の放

送と新聞記事であり、国民にとって突然の報道だった。そしてその瞬間からこの国と国民の運命は大きく変わることになった。しかし、圧倒的多数の国民はそれらについて何の疑問も抱かず、まともな理解もできる筈はなかった。そればかりか緒戦勝利の報道は「さすが皇軍だ、神の国の軍隊だ」と国民を沸き立たせ、戦争必勝の確信を国民に抱かせる効果をねらったものだった。それは、私達「末期戦中派」の少年たちに対して、もっとも効果ある結果をもたらしたといわなければならない。



その前年、つまり昭和十五年(1940年)は、「皇紀二千六百年」が謳われた年である。「神国日本」にとって記念すべき年だった。国を挙げての祝賀がおこなわれ、歌がつくられ、遠くドイツからも『ヒトラーユーゲント』が招かれた。

若者向けに「神国日本」への誇りと自覚を持たせる諸行事が相次いだ。十四歳の軍国少年たち、私も、当然そのなかの一人だった。「神がつくりたまうた国ニッポン、その国に誇りを持ち、国のために生命を捧げよう!」と誓い合ったものである。

こうしてこの国は、無謀にも悲惨きわまる太平洋戦争へと突き進んでいった。

では昭和二年生まれの「末期戦中派」は、戦争のなかでどんな生き方を強いられ、何を感じたであろうか。まず「戦中体験」からふり返ってみよう。

話に入る前に、私の育った生活と環境をかいつまんで述べておくことにする。

私は北海道札幌市の生まれ。当時の札幌はまだ人口二十数万人の中規模都市。春になると、どの家の軒下にも「春告魚」と呼ばれる「鯧」の開きがぶら下がっていた。当時は鯧が沢山とれて、どの家でも「十貫目(60kg)入りの箱」で買い込んだ。自家製の『身欠き鯧』をつくるためだ。学校帰りに他人の家の「鯧の生干し」をおやつ代わりにちぎっても、誰も文句を言わない。そんなおおらかな風土があった。古きよき時代である。

私の家は、祖父が北海道開拓時代からの役人。昔は札幌駅の近くにあった「青官邸」なるものに住んでいたという。父も伯父たちも、そのほとんどが開拓使庁(北海道庁)の役人や関係する職業に就いていた。一人だけ異色の伯父がいた。作曲と音楽教師で一生を送った梁田貞である。「どんぐりころころ」や「城ヶ島の雨」の作曲で知られている。彼は東京に一人出てきて、世田谷・成城に住んでいた。私が今度三鷹から世田谷に移転しようと思いついた時、ふと思い出した



のはこの伯父のことである。ともあれ、そんな親戚縁者に囲まれて私は育った。比較的恵まれた環境だったといえる。

もう一度作家・吉村昭に登場してもらおう。彼の書いた小説に『赤い人』という変わった表題の小説がある。「赤い人」とは「重罪を示す赤色の囚人服を着た人」という意味であろう。北海道の開拓が囚人労働によっておこなわれ、それが大きな役割を果たしたことは、「鎖塚」の存在などによってよく語られ、知られている。吉村昭のこの本もそれを描いたものである。明治のはじめ自由民権をめざして闘った人々も、送り込まれたという「樺戸監獄」、その監獄の建物建設の頃のことをこの吉村昭の小説は、克明に調べ描き出している。罌が多数出没する昼なお暗い鬱蒼とした原始林、それを大変な労力を使って伐り開き、脱獄絶対不可能といわれた樺戸監獄を建設した。その道路建設などを測量・設計した人物の名前がこの小説に実名で登場する。それが私の祖父・梁田政輔である。

彼はいま札幌平岸霊園の自分が建立した墓に私の父母や若くして亡くなった姉、花巻市から私と従兄弟孫たちが移葬した多くの先祖たちの遺骨などと共に眠っている。

吉村昭の小説のどこまでが事実で、どれがフィクションなのかは私の全く知るところではない。しかしここに出てくる政輔が私の祖父であることは間違いないと言ってよいだろう。その祖父の影響もあつてのことであろう。私の父も札幌市街地を流れる豊平川の架橋作業などに携わっていたらしく、その完成を誇らしげに書いた手紙が私の手元に残されている。もともとその橋は現在すでに架け替えられて無くなっているのだが・・・。



話が半分横道に逸れてしまった。要するにわが家の歴史は、かように北海道開拓と結びついている。私ももし、まともに大学を卒業し、北海道で生活する道を歩んでいたら、多分北海道開拓史の研究などに携わっていたかもしれない。

話は全く違うが私の少年時代、周辺の家々の表札には、まだ「元平民」とか「元士族」など昔の身分関係を示す標示が残されていた。封建時代のなごりである。そんな時代に私は末っ子の長男として生まれた。うえ三人は姉達である。姉の一人は若くして結核で亡くなり、いま生き残っている姉は、今年百歳と九十八歳になる。さすがに最近口にしなくなったが、むかし私はよく姉たちから言われたものである。「貴方が寝ている枕元を歩くと、父母にきつく叱られた」と。

私の幼い頃は「家」がなによりも大切だった。そして家を継ぐ長男は格別の存在だった。食事時、父と私は一人宛ての箱膳で畳の部屋。母や姉たちは、お手伝いさんを含めてみんな一緒。円いテーブルを囲んでの食事だった。顔も見え、話も通じたが、すぐとなりの別の部屋だった。畳の部屋ではなく、板張りにリノリウムが敷いてあった。

いま「ジェンダー平等」を主張し、自らも実践しようと心がけている立場からすれば、これらのことは、ふりかえって多少気になるところだが、幼少の私を大事に育ててくれた両親・姉たちに改めて感謝しなければならないだろう。だがこうした状態は、あまり長くは続かなかった。

私が九歳の誕生日を迎えた数日後、母はその日のくることを知っていたかのように四人の子供たち一人ひとりを枕元に呼んだ。そして自ら正座して子供たちに希望する「ひとこと」を遺言し、その数日後に亡くなった。肺結核だった。歳はまだ三十六歳、見事な最後だったというべきだろう。その遺言は、いまでも私の心に奥深く刻みつけられている。そのあと一ヶ月位経ったころではなかったら



うか。私の修学旅行の日がやってきた。友人たちと一緒にとはいえ初めての一人旅である。行き先は洞爺湖で一泊だった。父がくれた「小遣い」は確か五拾銭ではなかったらうか。そのころはまだ「厘」単位の貨幣が通用していた。一厘で「あめ玉」三個ぐらいは買えたと思う。だから当時の五拾銭は、いまの五千円か一万円に相当するのではなかろうか。私にとって、もちろん初めて手にする金額だった。ただその時の父親の態度が日頃と違って、どことなく寂しげだったことをいまでも思い出す。そのあと父は急性肺炎で入院し、あっけなく亡くなった。多分母と同じ肺結核にも侵されていたのであろう。父の遺体が入った柩が、病院から家に戻ってきた時に感じた孤独感と悲しみは、あれから八十余年を過ぎた今でも思い出すことができる。

父母が亡くなり、姉三人と私を取り残された。いろいろなことがあったが、それでも私や姉たちは、祖母の弟や義兄・親戚の援助もあって、中学校・女学校で学ぶことができた。当時の時代を考えるならば、父母がいないもとでのこうした状況は、かなり幸せだったというほかない。だが私にとってこの中学校生活は、つぎに述べるように結構きつい試練の日々だった。

私の中学時代—私は札幌二中(現在の札幌西高校)の第29期卒業生—は次のようなものだった。昔の話なので、もちろん不正確なことはたくさんあるに違いない。それは勘弁していただく。

私が入学して直ぐの頃に「体力検定」がおこなわれたと記憶する。這う、走る、跳ぶ、投げる、担ぐなどが、項目別におこなわれる「体力テスト」である。足にはゲートル、背にも背囊、手には「剣付鉄砲」に似せた「木銃」、それらを持って、校庭の端を「匍匐前進」させられる、模擬手榴弾を投げてその距離を測る、米一俵 60 キロを担いで走る、などの定」である。それらの成績は三段階に分けて評価され、それぞれの合格者には金・銀・銅にメッキされたバッチが渡され、表彰された。クラスの五分の四くらいの人たちは、なにかには合格し、メダルがもらえなくても一応及第点が付けられた。しかし私は残念ながらどのバッチともまったく縁が無く、それどころかほとんどが平均以下で、それほど多くはなかったと記憶する「体力検定」総合不合格者の一人だった。

中学入学の頃から近視が急に進み、それに加えて白いものを見ると涙が溢れ、その頃はまだ不自由なく食べられた米飯が、眼病のために食べられない。そんな厄介な状況に陥った。黒板の字が満足に読めず、教壇の下まで出て行って書き写した。これではまさに「軍人不適格」の烙印を押されたようなものである。その頃この言葉はそのまま「役立たず」を意味していた。私はコンプレックスの「塊」になってしまった。

当時の中学校は、陸軍士官学校や海軍兵学校、航空予科練習生などの予備校的な側面もあった。学校全体が軍隊組織にならって編成され、運営されていた。一学年が約 250 人、一年から五年までで総勢約 1250 人、軍隊風に言えば大隊編成に相当する数である。

最上級生で「教練」科目が成績優秀な生徒が、小隊長、中隊長、大隊長の役割を果たすことになっていた。これらの五年生は「指揮刀」と称する金属製のサーベルを腰に下げ、それぞれが同級生・下級生を部下にして活動の先頭に立った。

一年生から三年生までは、歩兵銃の代わりに「木銃」で、四年生と五年生は本物の三八歩兵銃(但し銃身に刻み込まれていた『菊の紋章』は削りとられていた)で武装した。私の小学校の幼馴染・N君は、全校でただ一人の大隊長役。全校生徒の前に立って指揮刀をかざし、「校旗に対し敬礼・捧げ銃」と号令をかけた。私達は彼の号令に従って一斉に行動する。N君の颯爽とした姿は、とても恰好よく羨ましかった。彼とは老齢になってもかなりの期間つき合ってきた。しかし残念ながら十年ほどまえに亡くなった。

当時の中学校では、教師や上級生に街で逢った場合にも、軍隊式の「敬礼」をするのが「きまり」だった。強度の近眼だった私にとって、これが「恐怖」のタネだった。教師の場合、逢うことはほとんど無かったが、上級生の場合は大変だった。学校を識別する帽子の白線が一本なの

か、二本なのか、学生服の襟元に着けた学年識別記章の内容、そんなものは私には見えるわけではない。学校や学年を間違えて、敬礼したり、欠礼したりすることがしばしばあった。笑われるのはやむをえないが、意地の悪い上級生に出会うと笑いでは済まされない。多くの場合「欠礼」を理由に、いきなり殴られた。なかには二千数百字にのぼる「軍人勅諭」を暗誦させる意地の悪い上級生もいた。

その「軍人勅諭」は、「一つ軍人は忠節を尽くすを本分とすへし」以下五つの項目を強調していた。「忠節」「礼儀」「武勇」「信義」「質素」がそれである。とりわけ「礼儀」の項では「下級のものは上官の命を承ること実は直に朕(駐-天皇のこと)か命を承る義なりと心得よ」とあり、「上級の者は勿論停年の己より旧きものに対しては総べて敬礼を尽くすへし」と謳っていた。そうした文章が「下級生いじめ」に利用されたことはいうまでもない。なにしろ「天皇は神様の時代」だった頃のことである。

「眼鏡とれ、歯を食いしばれ」と号令をかけ、眼鏡を取り外すや否や相手の頬を殴りとばす。これは日本陸軍の伝統的な制裁手順の一つだった。それがそのまま当時の中学校に持ちこまれ。あらためて考えてみると私自身も、そんなに多くはないが一度か二度は、下級生の頬を殴ったような気がする。いま考えても恥ずかしく申し訳ないことである。

二年生の時だっただろうか。私は「教練」の成績表に「丙」か「丁」を点けられたことがあった。何かの拍子に足がもつれて「木銃」を倒したことが、多分その原因ではなかっただろうか。配属将校(当時中学校には現役の陸軍将校が配属されていた)がそれを見つけて、とんできて私を殴りつけたからだ。理由はともあれ「教練」の成績が落第点では、ことが重大である。下手をすると進級にも差し支える。それからというもの、私は配属将校の覚えが良くなるように必死になって努力した。マラソンもやった。銃剣術の練習も友達を誘って、毎日指から血が流れるほど頑張った。二百米離れた「標的」は、はっきり見えなかったが実弾射撃の訓練も欠かさず体験した。そして「行軍班」と名を変えた「札幌二中山岳部」にも入部し、札幌近隣の行軍登山に参加した。

こうした努力が実り、そのために配属将校の覚えも少しは良くなった。そしてようやく「教練」の成績も合格点をもらえるようになった。

もっとも私達が中学三年生になった頃からは、学校に通う日が少なくなり、教練の授業でさえもまともにおこなえなくなってきた。学校の「成績表」に全く無関心になるほど、授業自体が不規則なものになっていった。一言ふれておくと私達の中学生活では、リクリエーション的色

彩の授業は、「海水浴」が多分一回、軍事訓練を兼ねた「野兎狩り」が一回か二回、修学旅行などはもちろんおこなう余裕が全くなくなった。

戦況が厳しくなるにつれて、農家の人手不足が深刻になってきた。そして中学校生徒は、相次ぐ「援農」に駆りだされた。多分二年生の終わりか三年生の初めが最初ではなかったろうか。野幌の原始林に分け入り、そこでの土地改良の仕事に携わったのが初めてではなかっただろうか。一回の期間が一ヶ月だったか、二ヶ月だったか、それらの記憶もあいまいである。ともかく何度も何度も出かけた記憶だけは残っている。気の遠くなるような広さの畑と田んぼ。そこでの草取り、稲刈り、収穫などいろんな作業が待ち受けていた。どうしたわけか田植えの記憶だけはない。腰や肩や背中が痛く、転げ回って息もつかないほど辛かった。しかし楽しい時もなくはない。時には馬にまたがって出かけたこともあった。往路の馬は、なかなかいうことを聞かない。でも帰りになるとまっすぐ走り出す。長くいると馬の気持ちも少しは分るようになる。

当時、北海道の農村では、電気の通じていないところが大半だった。ランプの灯りのもとでの生活は大変だった。勉強はなかなか手につかない。ランプの手入れもしなければならない。作業の疲れでいつの間にか眠りこけてしまうのが毎日だった。

援農作業に行った町村は、野幌、由仁、妹背牛、雨竜など数カ所に及んでいる。あるいはもっと多かったかもしれない。勉強は余りできなかつたものの、三度の食事は欠かさず食べられた。これは育ち盛りの中学生としてはなによりも有難かった。そしてその労働を通して、北海道農業の大変さと開拓農家の苦勞と困難を直に味わい、学ぶことが出来た。これは何にも代えがたい収穫ではなかったろうか。そしてこれらの労働を通じて小学生時代「虚弱児童」と呼ばれた私の体も鍛えられ、多少はまともになったのではなかろうか。

もちろん援農の合間には、学校の授業もあつたに違いない。試験もあつたと思う。ところがいまふり返ってみるとその授業や試験の場面は、記憶のどこにもほとんど存在しない。そして覚えているのは、友人との銃剣術試合や練習、校庭の端から端へと飛んだグライダーの操縦、服やズボンをボロボロにしながら歩き、タコ部屋(強制的な奴隷労働を強いられていた労働者の宿泊所)から逃げ出した中国人・朝鮮人の労働者と間違えられた札幌近郊の山行などなどである。私の中学校生活をめぐっての思い出は、援農などの労働のほかはそんなことしか浮んでこない。

一次号に続くー

(弦巻在住)

## 【当面の行動予定】

- 9/9(木)~ 12(日) 区内一斉宣伝行動  
9/9には、18時から『生かそう憲法！今こそ9条を！世田谷の会』が小田急線梅ヶ丘駅での宣伝を予定しています。各地域での自主的な取り組みをお願いします。
- 9/18 世田谷革新懇学習会 14時から経堂地区会館第三会議室 経済学者の友寄英隆さんの講演 演題「コロナ・パンデミックと日本資本主義のゆくえ」
- 9/25 (当初 10/30) に予定されていた「戦争させない！九条こわすな！世田谷連絡会」主催の区民集会&パレードは、コロナ感染拡大の懸念から中止となりました。
- 11/5 「生かそう憲法！今こそ9条を世田谷の会」講演会 講演 元福井地裁判事 樋口英明さん 梅ヶ丘パークホール
- 11/13 世田谷・九条の会 16周年のつどい 13時半から梅ヶ丘パークホール集会室 講演 佐藤 慧さん 演題は追って連絡します。

### <佐藤慧さんプロフィール>

1982年岩手生まれ。NPO法人 Dialogue For People (ダイアログフォーピープル D4P) 所属フォトジャーナリスト、ライター。同団体の代表。世界を変えるのはシステムではなく人間の精神的成長であると感じ、紛争、貧困の問題、人間の思想とその可能性を追う。言葉と写真を駆使し、国籍・人種・宗教などを超えて、人と人との心のつながりを探求する。アフリカや中東、東ティモールなどを取材。東日本大震災以降、継続的に被災地の取材も行っている。著書に『しあわせの牛乳』（ポプラ社）、同書で第二回児童文芸ノンフィクション文学賞などを受賞。東京都在住。



## 【お便り】

- いつもありがとうございます。僅かなカンパでごめんなさい。(船橋・Kさん)
- いつもありがとうございます。皆様のご投稿に励まされます。(羽根木・Tさん)

## 【俳句の夏と秋】

山形 三郎

立秋（8月8日）から立冬（11月8日）の前日までが「俳句の秋」であるが、立秋と云っても、実際は、猛烈な暑さが続いている頃である。時節と季節感の乖離が大きい。しかし、街でも朝晩には、「秋」を感じる時もあり、高原では、「秋の風」が吹く。芭蕉が「奥の細道」加賀の旅で詠んだ「あかあかと日は難面（つれなく）も秋の風」は正に、この時期の句である。

晩夏の例句：

「紅くして黒き晩夏の日が沈む」 誓子

「うすもやをこめて菜園夏深む」 蛇笏

「疲れきてすぎる晩夏の仏かな」 楸邨

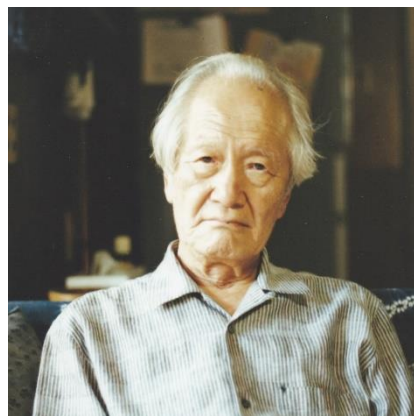
夏の投句：

「雨長し紫陽花の色褪せにけり」 (Aさん)

「雷鳴の朝のカーテン揺れ動く」 (Mさん)

## 【追悼】

本会の発足以来、会の代表として力を尽くしていただいた吉原公一郎さん（右写真 ©宮濱祐美子）が、去る8月6日に逝去されました。心よりご冥福をお祈りします。吉原さんは、九条の会の活動とともに、ジャーナリスト、ノンフィクション作家として、多くの著作や戯曲を残しておられます。九条の会では、ご遺族から託された作品の一部を事務局で保管させていただくことにしています。リストその他詳細は追ってお伝えすることになっています。



今年に入って、事務局で尽力いただいた酒井忠道さん、呼びかけ人のお一人だった中村博さん、さまざまな機会にご一緒いただき、被曝体験をお話いただいた木村徳子さんと、訃報が相次いで届きました。悲しいことですが、遺志を継いで前に進んで参りたいと思います

## 【編集後記】

☆ 戦後 76 年が経過しました。8 月末発行の本号では、戦争の惨禍を目の当たりにし、また戦後の苦しい生活を体験してこられた方々の声をいくつか寄せていただきました。お忙しい中、ありがとうございました。実際に戦争を体験し、実相を体験された方々の数が次第に減っていく中、戦後の新憲法で誓った平和・人権・民主の声を次の世代に確実に残していくことは、ますます重要になっています。掲載されたお話しから思い出されることがありましたら、ぜひ事務局にご連絡ください。原稿をお送りいただいても、また事務局員が聞き取りに伺って原稿化することも可能です。

☆ 事務局内の雑談で、戦後の「ヤギ乳」が話題になりました。「臭くて飲めなかった」という人もいました。戦後生まれで、小学校の高学年になるまで牛乳の味を知らなかった編集子にとっては、味や臭いは関係なく、ともかく栄養補給になったと、池の上駅近くでヤギを飼っていた祖母に深く感謝しています。ヤギは牛と違って半年間しか乳がとれないという話もこの雑談の時に聞かされました。

☆ 新型コロナのデルタ株が国内で猛威を振るっています。オリンピック期間中から新規感染者数が急上昇して、コロナであってもなくても、入院治療が困難な事態になっています。高齢者にはワクチン接種がひととおり行きわたったようですが、若年・中年層の中には、まだ予約がとれずに不安に駆られている人が多くいます。働き盛りの年齢層で感染し、入院先が見つからず、自宅で亡くなるという事例がいくつも出ています。これまでかかりにくい、重症化しにくいと言われていた子どもにも広がっています。「野戦病院」的な臨時医療施設を緊急に整備すべきという声は 1 年以上前からありましたが、ここに来てメディア・医療関係者の間でも広く取り上げられるようになりました。にもかかわらず、政府も都も「酸素ステーション」止まりで、それ以上動こうとしません。まさに患者放置、医療崩壊の事態を招いてしまっています。私たちの命と生活を守るために、これ以上菅政権の無策を許容することはできません。折しも横浜市長選で、自公が推す現市長と菅推薦候補が落選し、刷新を訴えた候補が当選するという報道がありました。この勢いで、秋の総選挙では、日本の政治を変える一票を投じて行きましょう。



☆ 引き続き一口千円のカンパをお願いします。振込用紙には「お便り」も。